

マスキュリニティの束縛からの解放 ——ドゥルシラ・コーネルの議論を手がかりにして——

綾部 六郎（同志社大学法学部法律学科教員）

rokua@yahoo.co.jp

イマジナリーな領域を頑強に主張し続けるフェミニズムは、
全ての人が生の栄光を分かち合える社会があるのだという
私たちの夢を失わせないようにする想起的想像力によって
自らを導くのである [コーネル、2001a:58]

1. 話題提供の概要

本日はわたしが共訳者のひとりとなって昨年度末に御茶の水書房から刊行されたドゥルシラ・コーネルのマスキュリニティ批判の書である『イーストウッドの男たち:マスキュリニティの表象分析』[コーネル、2011]をベースにして話題提供したい。

昨今、さまざまな痛ましい事件についての報道をわたしたちは目にするが、この大学という場にかかわる問題として、学生が中心となって被害者に対して集団で性的暴行がおこなわれ、さらにはこうした一次被害だけではなく、たとえば事件の被害者に対してインターネット上で思慮の欠いた非難などもおこなわれる、という二次被害の存在も明らかになっているところである。

もちろん、このような性暴力がなぜ振るわれるのかという原因については、さまざまな説がありえるものと思われる。今回の話題提供では、コーネルのマスキュリニティ論をひとつの仮説として紹介することで、性暴力で苦しむ人びとが少しでも減るような社会を創りあげていくための契機をもたらすことができれば、と願っている。

では、話題提供のおおまかな流れを簡単に提示しておこう。最初に、コーネルとはどんな人物なのかということや、その代表的な理論などについて簡単に紹介する。つぎに、コーネルのマスキュリニティ概念に焦点を当てて、具体的な事例などを取り上げながらその意義を説明する。最後は、それまでの話を簡単にまとめて終わりにしたい。

2. コーネルについての簡単な紹介

コーネルが2009年にデューク大学女性学センター主催シンポジウムでおこなった基調講演の模様¹を見れば、実際のかのじょの人となりや、この動画だけでも、かのじょがユーモアや親しみやすい雰囲気になれる人物であるということがわかる。コーネルはこれまでに二度来日しているとのことだが、コーネル理論の紹介や研究書の監訳などをこれまでに精力的におこなってきただけでなく、かのじょの来日時にはアテンダントまで務めた仲正昌樹によるインタビュー記事もあるので、関心をおもちの方は[コーネル、2001b]などをご参照願いたい。

コーネルは当初入学したスタンフォード大学を卒業直前に退学したのちに、1978年にアンティオーク・カレッジを通信教育で卒業したあと [コーネル、2005:36]、81年にはカルフォルニア大学ロサンジェ

ルス校のロースクールで法務博士(J.D.)の学位を取得している。10代のころからすでに詩作をおこなっており、スタンフォード大学中退後は労働組合の専従活動家としても活躍したのちに、イエシヴァ大学のベンジャミン・N・カードーズ・ロースクールでの勤務などを経て、現在ではラトガース大学の政治学部の教員として、法哲学・政治学・女性学などを教えている。かのじょは、カードーズ・ロースクール時代に「脱構築」概念の提唱者として世界的に著名であった現代フランスの哲学者ジャック・デリダを招いて、脱構築の法学的含意について論じるカンファレンスを企画して成功させたことにより、その名声をより高めることになった²。

著作にかんして言えば、初の単著である『脱構築と法——適応の彼方へ』[コーネル、2003]をはじめとする翻訳書が、御茶の水書房やみすず書房から刊行中であり、現在もカント哲学や批判理論などのドイツ思想史上の問題について論じている『自由の道徳的イメージ』(仮題)[Cornell, 2008]の翻訳作業が進行中である。さらには、論文や対談の翻訳も『現代思想』誌(青土社刊)や『情況』誌(情況出版)などに掲載されていることも付記しておく。

このように目覚ましい成果を挙げているコーネルであるが、仲正とのインタビュー[コーネル、2001b]や、家族との思い出を語った著作[コーネル、2005]のなかで語っているように、かのじょはスタンフォード大学の学生であったときから学生運動の闘士として活躍し、その後は労働組合での活動に従事していた時期もあったため、多くの大学教員が経験するような「順調な」キャリア・パスを経由していない。こうした経歴がコーネルの思想形成に多大な影響を与えている。その影響は以下の二つにまとめられるだろう。一つ目は、かのじょがみずからの思想体系において、「理論／実践」や「物質的／文化 or 象徴的」などの二分論的区別への批判的スタンスを保ち続けている、ということである³。二つ目は、マイノリティが主導する社会運動のなかでは、とかく無視されやすい「マイノリティのなかのマイノリティ」の立場に対する配慮の必要性を強調している、ということである[コーネル、2001b:59]。

コーネルのこうしたスタンスを理論的に支えるものとしては、ジャック・ラカンの精神分析理論とデリダの脱構築概念などが挙げられる。かのじょはこの両者を活用することで、自己再想像の場を切り拓き、確保するためのメタ権利論である「**イマジナリーな領域への権利**」という特異な権利概念を提唱している。この権利概念は、自己が身に付けているアイデンティティに不調を来し、アイデンティティを変更したいと思っている人が、周囲の「他者」たちの支援を受けながら自己を再想像する権利、「自己」決定することのできる“自己”へと到達することを社会的関係性の中で支えてもらえる権利として構想されたものである[仲正、2005:222]。コーネルの理論についての詳細な分析である[仲正、2002]も参考にすれば、この権利概念の特長は以下のように敷衍できるだろう。

- ①自律した個人を中心に据える従来の権利観ではなく、わたしたち一人ひとりがさまざまな社会的環境のなかで折り合いをつけながら、終わりなきプロセスを生きていくのだというあり方を前提とし、そうした生き方を損なうことのないような権利観を構想するものであること[コーネル、2006:4-5；仲正、2002:199-201]。
- ②レイプなどでトラウマを受け傷ついた性的イマーゴ⁴を回復するためのプロセスを「想起的想像力 recollective imagination」という概念を用いて明確化することで、法的議論に乗りにくい問題を顕在化させようとしている[コーネル、2001a:25-6；仲正、2002:202-4]。
- ③この権利概念は上記のような、近代法では主題的に扱われることがほとんどない問題を認識し、

こうした暗黙の前提を根本的に変革する可能性を有している〔コーネル、2001a:217-8；仲正、2002:217-8〕。たとえば、多くの家族法制度のもとで暗黙の前提とされている、異性のモノガマスなカップルとその子から構成される核家族をその中心的な位置から解放し、さまざまな属性のすべての人びとが望めばパートナーシップ制度による法的保護を受けられるようにすることなどがその代表的な例である⁵。

3. コーネルのマスキュリニティ概念について

これまでコーネルについての簡潔な紹介をおこなってきたが、本節以降では〔コーネル、2011〕で示されている「マスキュリニティ（男性性）」の概念について考えてみたい⁶。まず本訳書にかんする平易な内容紹介として、監訳者の吉良貴之によるオンライン・レビューがあるが、それによれば本書の魅力とは、クリント・イーストウッドという人物＝形象に対してわたしたちが抱いていた「男らしくマッチョな白人の男性異性愛者」という単純なイメージを攪乱させ、イーストウッド監督作品が有している両義性の存在を剔抉したことにある⁷。この両義性とは、①作品のなかでは男らしくマッチョな白人男性の主人公が活躍しているが、②その主人公がいわば「理想的な」ジェンダー・ロールを演じ切ることはなく、むしろなんらかの挫折経験などを抱え込み、それを引き受けながら生きていく、というあり方が描かれていることだと言える⁸。イーストウッド監督作品という映像素材を用いつつ、マスキュリニティの問題についてコーネルなりの立場から切り込んだというところに、本書の具体的でわかりやすいアプローチのメリットが存在している。

マスキュリニティという概念一般についての分析は、すでにさまざまな観点からなされているが〔吉良、2011:342-3〕、コーネルが依拠しているのは上述のラカンの精神分析理論である⁹。精神分析がなぜ重要なのかと言え、この世界に生まれたわたしたちが性化されるプロセスについての重要な見通しを与えてくれるだけではなく、自由な人格の形式がいかにして形成されるのかという問いと、わたしたちの文化の根底にありそれを成立させている基盤とを再考するための契機をもたらしたということも、その重要な意義だからである〔コーネル、2003:4-6〕。この点、ある種のフェミニストからは性差の本質化を説くものだとして否定的に評価されることの多いラカンの精神分析理論を、批判すべきところは批判しながらも、あえて肯定的に読みなおそうとするコーネルの試みは、フェミニズムの流れのなかでは特異な位置に立っていることを指摘しておきたい¹⁰。

コーネルのマスキュリニティ概念を理解するために必要な限りで、簡単に解説をしておこう。まずはファルスとペニスとの違いである。これは簡単に言えば、ペニスは男の両脚の間に物理的に存在するモノであるが、ファルスとは男がもっていなければならないと人びとに考えられているモノである。こうした「ファルス幻想」がマスキュリニティをも生み出している。

では、こうしたファルス幻想にとらわれた人びとは、どのようにしてこの幻想から解放されるためのすべを得られるのだろうか。コーネルはここでラカンが示した倫理的目標としての「**象徴的去勢 symbolic castration**」という概念の重要性を強調している。これは、わたしたちがみずからの有限性という脆さとそれがもたらす限界から逃れることはできない、ということを理解し受け入れることで、全能感とそれに深く結びついた傲慢さを供給している、マスキュリンなファルス幻想から解放されることを意味しているのである¹¹。

以上述べてきたように、人びと（とくに男）は全能感（全体感）を供給する源であるファルスを所有する者として自己のアイデンティティを確立することになるが、これは幻想にしかすぎない。しかし、

こうした全能感に基礎づけられた傲慢さが人びとに破滅をもたらす様が、イーストウッドの映画では描かれている。

4. 具体的な事例のうちにみるマスキュリニティの問題

本節では、イーストウッド監督の映画作品や性暴力加害者の手記を取り上げて、そこに表れているマスキュリニティの問題を見てみよう。以下ではまず、典型的な復讐劇であるかのように思われている『ミスティック・リバー』（2003年）について論じる。この作品には、おたがいに幼馴染であるデιβ、ジミー、ディバインという三人の男性が主要人物として登場するが、ここでは成人後に警官となったショーン・ディバインとその妻ローレンとの間の和解のストーリーに注目したい。ディバインは警官として友人ジミーの娘を殺害した犯人を追っているが、プライベートの生活では妊娠中だった妻ローレンに自分のもとから去られ、その後は電話でのみおたがいとやり取りをする、という関係になってしまっている。だが、われわれの目に奇妙に映るのは、ディバインがローレンと電話で話そうとしているときに、ローレンはなにも喋らず（というよりも、なにか話そうとはするのであるが、結局は発話を断念してしまっているかのようにみえる）、しかもスクリーンにはかのじょの顔全体ではなく口唇だけが映し出されていることである。こうした描写が含意していることについては〔コーネル、2011:233-6〕に詳しいが、わたしたちが注目したいのはここでのディバインの態度である。かれは一方的にローレンに話しかけてはいるのだが、そこではなぜかのじょが自分のもとを去らざるをえなかったのかということへの反省の態度は表立ってはみられず、みずからの過ちを問うようにも思われない。これはまさにコーネルが説くところのマスキュリニティの問題点である、ある種の傲慢さの束縛からディバインが逃れられていないということを意味しているのだとは考えられないだろうか。

本作品がクライマックスを迎え、誤解によりデιβを殺害してしまったとジミーがディバインに告白し二人が別れてから、ディバインの携帯にローレンからの電話がかかってくる。今度はディバインがみずからの過ちを認めて、ローレンに謝罪するのであるが、そのときにそれまでは口唇だけの存在として描かれていたローレンが初めて声を発し、かのじょの相貌もあらわとなる。ディバインはみずからに対する象徴的去勢を受け入れたことで、全能感と傲慢さというマスキュリニティの束縛から解放され、ロー



図・1ローレンの口唇のみの描写
『ミスティック・リバー』（イーストウッド、2003年）



図・2ローレンの素顔

レンや娘との関係を回復させることができたのである。

つぎはある性暴力加害者の手記を取り上げてみたい。この手記の主である樹月（仮名）は、強姦罪と恐喝罪により有罪判決を受け、現在は刑務所に服役中とのことであるが、この手記のなかで刑務所内のさまざまな問題やみずからの心境について書いている。少し長くなるが、樹月じしんが性暴力の原因だと考えているものが明確に示されている記述があったので、以下に引用しておこう。

性暴力というと、どうしても人は「性欲」の問題だと理解しがります。しかし、私が本当に求めていたことは、強姦という性行為ではなく、強姦後に作る「被害者たちとの関係性」でした。他者と嘘と演出で意のままに操ることで、自分の優位性や切れない関係を維持しようとし、そのことで半ば無自覚的に自尊心を満たしていたのです。自分の劣等感や支配欲などの裏返しだったのでしょう。当時の私はそうした否定的な感情と等身大の自分を直視することができず、強迫的に性暴力によって感情の穴を埋めていました [樹月、2011:311 強調は綾部]。

すでに明らかなように、コーネルが説いているマスキュリニティの問題と同じもの、すなわち全能感と傲慢さに満ちたみずからの負の感情に抗うことができないまま、性暴力を振るう姿がここでも描き出されているのである。

5. おわりに

今回の話題提供を終えるにあたり、二つのことを確認しておきたい。まず象徴的去勢のもつポジティブな意義についてである。去勢にかんするわたしたちの通常の語感では、本来有しているはずの生殖機能を失しめるということでネガティブなイメージを抱きがちであるが、コーネルが述べているのはこのような身体的去勢のことではなく、全能感の象徴であるファルスからの解放ということの意味するものである。この点で、ひとが成長の過程で社会的存在となるために体験するものであるラカンじしんの去勢とは異なった意味で用いられていることにも注意しておく必要があるだろう¹²。コーネルの場合、去勢とはより豊饒な関係性を構築するために、人びとが引き受けるべきある種の理想として読み替えられているように思われる。

これと関連して、つぎに挙げておきたいのは「想像力」の重要性である。コーネルは想起的想像力という概念を用いることで、みずからのトラウマからの回復を試みようとする人びとのあり方を説明しようとしていることについてはすでに述べた。想像力とはこのような自己回復の契機としてだけ存在しているのではなく、みずからのアイデンティティの可変性を担保し、ともに生きるわたしたちの「傷つきやすさ」を受け入れ、少しでもその苦しみを減らし、そして分かち合っていくという倫理的態度を支えるものでもある。コーネルがわたしたちに示しているのは、まさにこのような想像力の価値なのである。

謝辞：準備の過程で有益なコメントを賜った濱真一郎さん（同志社大学法学部法律学科教員、法哲学／法思想史）や小久見祥恵さん（日本学術振興会特別研究員 PD、法哲学／ジェンダー法学）、さらにはセッションの会場で活発にご質問くださったみなさまにお礼申し上げます。なおも残る問題については、綾部だけが責任を負うべきものです。

¹ <http://youtu.be/51SLGplSnkM> (12:49 以降)

² その成果は [デリダ、1999] として邦訳されている。

³ この二分論はフェミニズム陣営のなかでもきわめて論争的なテーマである。たとえば [フレイザー、2003:19-62] など参照せよ。

⁴ コーネルによれば、イマーゴとは「私たちの各々が生きていくに際してどのように団結し合うのかをめぐる原初的なイメージ」のことである [コーネル、2001a:22]。

こうしたイマーゴの概念によって支えられている身体的統合性などについて考えることが権利の問題を考える際にどれほど重要なのかということにかんして、ラカンの精神分析理論によりながら、妊娠中絶の問題を例に解説したものととして〔コーネル、2006:51-7〕を参照せよ。

⁵ コーネルのラディカルな示唆と対比的なものとしては、現代日本における家族法改正の有力な方向性を示すものである〔中田編、2010〕がある。

これに関連して、性的マイノリティの当事者たちへのアンケート調査を通じて、同性パートナーシップ制度のあり方を構想している興味深い調査報告に〔有田・藤井・堀江、2006〕がある。

⁶ これに対して、コーネルによる「女性性 femininity」についての分析はさまざまな著作でおこなわれているが、さしあたり〔コーネル、2003〕などを参照のこと。

⁷ <http://wan.or.jp/book/?p=1350>

なお、監訳者の吉良が作成した〔コーネル、2011〕の特集ウェブサイトとしては、以下のものがある。<http://jj57010.web.fc2.com/eastwood.html>

⁸ 2012年1月28日より日本でも公開が始まった最新作『J・エドガー』（2011年）で描かれている、アメリカ連邦捜査局初代長官ジョン・エドガー・フーバーもまさにこうした形象として表象されている。

⁹ ラカンによる講演会の模様が動画で配信されている。<http://youtu.be/iL6rkBSHS4A>

¹⁰ たとえば、竹村和子によるラカンへの批判として〔竹村、2002:99-105〕を参照せよ。

¹¹ これに関連して、デリダの脱構築という営為を「限界の哲学」と読み替えて、その積極的な意義を論じるものとして〔コーネル、2007〕を参照のこと。

¹² ラカンの去勢概念についての平易な説明としては〔斎藤、2006:66-78〕を参照のこと。なお、本文のように指摘したが、両者の去勢概念におおきな違いがあるわけではない。

参考文献（アルファベット順）

有田啓子・藤井ひろみ・堀江有里 2006「交渉・妥協・共存する「ニーズ」：同性間パートナーシップの法的保障に関する当事者ニーズから」『女性学年報』第27号、4-28頁

コーネル、ドゥルシラ 2001a『自由のハートで』石岡良治ほか訳、情況出版

同 2001b「『脱構築』と『政治』の間で」（聞き手＝仲正昌樹）『情況』第3期第2巻第5号、54-60頁

同 2003『脱構築と法：適応の彼方へ』仲正昌樹監訳、岡野八代ほか訳、御茶の水書房

同 2005『女たちの絆』岡野八代・牟田和恵訳、みすず書房

同 2006『イマジナリーな領域：中絶、ポルノグラフィ、セクシュアル・ハラスメント』仲正昌樹監訳、遠藤かおりほか訳、御茶の水書房

同 2007『限界の哲学』仲正昌樹監訳、澤里岳史ほか訳、御茶の水書房

同 2011『イーストウッドの男たち：マスキュリニティの表象分析』吉良貴之・仲正昌樹監訳、志田陽子ほか訳、御茶の水書房

Cornell, Drucilla 2008 *Moral Images of Freedom: a Future for Critical Theory*, Rowman & Littlefield Publishers

デリダ、ジャック 1999『法の力』堅田研一訳、法政大学出版局

フレイザー、ナンシー 2003『中断された正義：「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』仲正昌樹監訳、キブソン松井佳子ほか訳、御茶の水書房

樹月カイン 2011「獄中からの手紙「私は再犯してしまう」」『文藝春秋』第89巻第15号、308-12頁

吉良貴之 2011「マスキュリニティの死後の世界」コーネル『イーストウッドの男たち』所収、339-51頁

小林美佳 2008『性犯罪被害にあうということ』朝日新聞出版

國友万裕 2011『マッチョになりたい!?: 世紀末ハリウッド映画の男性イメージ』彩流社

仲正昌樹 2002『法の共同体：ポスト・カント主義的「自由」をめぐる』御茶の水書房

同 2005『自己再想像の〈法〉：生権力と自己決定の狭間で』御茶の水書房

中田裕康編 2010『家族法改正：婚姻・親子関係を中心に』有斐閣

小久見祥恵 2008「『差異』と『平等』のジレンマに対する平等論のアプローチ：D・コーネルの理論を手がかりに」『同志社法学』第60巻第2号、101-39頁

斎藤環 2006『生き延びるためのラカン』バジリコ

竹村和子 2002『愛について：アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店